

転生王女は
王国の愛され
救世主

2

渡鳥紫苑
Shion Wataridori

イラスト 綴吏
Tsuzuri

◆ ◆ ◆
The reincarnated princess
is the beloved savior
in the kingdom

登場人物紹介



???

白い髪と肌、赤い瞳が特徴的な少年。神出鬼没で、暗闇から急に姿を現す。

オベロン

人族から妖精王と呼ばれる。妖精を従える神。その長髪はオーロラのように光り輝く。

ルーク&レオン

トレンシア帝国の双子皇子。表情は乏しく、話し方はそっくり。常に二人一緒に行動している。

テト

黒い毛が特徴の獣人の少年。人族への警戒心が強い。

アーサー

王宮の庭師を務める獣人の青年。レイチェルを常に傍で見守っている。

レイチェル・サン・ヴィクトリア

クリスタ王国の王女で、おひょうり転生前はアラサー会社員の桐生玲。明るく元気で、食べることが大好き。

第一章 異世界の学校生活 二年目

1. 医術を広める事にしちゃいました

私、レイチェル・サン・ヴィクトリアはいわゆる異世界転生をして、クリスタ王国の王女として生を受けました。

前世の私は、桐生玲きりゅうれいとして極々平凡な二十八年を生きていたのですが、トラックに轢かれ、気づいたら転生していました。

この世界では、食料の改善や開発、教育機関、ヘリオス学園の創設こうせつなど、王女に生まれたからこそできる方法で、よりよい国に、世界にしようと様々な事に取り組んできました。

もちろん、そのどれもが順調に進んだわけではないですが……

そんなこんなで沢山の事件を乗り越えて、私はこの世界でやっと五歳になりました。

あと数日で、学校が開校して一年になります。

早いですね……あつという間でした。

アラール連合国のサハラは、私が渡した稲いねの生産に取り組み、今では一大生産地になりました。

そして、独裁者カイザラックをその座から降ろし、正常な運営に戻ったミスト共和国は、あれから経済成長が著しく、昔に戻る勢いがあります。

両国とも、奇跡の復活と、大陸中でもつばらの噂です。

我が国の農作物も、キノコや果実など豊富な種類が流通して、お肉は畜産業で有名なシエロ王国からブランド牛やブランド豚の輸入もあり、とても美味しく、食卓が華やかになりました。日々のご飯が美味いといと、やっぱり幸せですね。

両親とお兄様の家族四人で食べる食事の時間が、ますます楽しみになっている今日この頃です。

「カイルお兄様！ このベーコンもとても美味しいですね」

咀嚼し堪能して、ほっぺが落ちないように手で支えながら、隣に座るお兄様に話しかけます。

「これがレイチエルの新しいプロジェクト、アップルベーコンなの？ 香りも食感も普通のベーコンと違っていて、とても美味しいね。さすが、レイチエルだね」

お兄様の満開の笑顔が、窓から差し込む朝日より眩しく感じます。

カイルお兄様は、金髪サラサラの髪を肩口で揺らしながら、白いふわふわのパンを手に取ります。

「今日も天使ちゃん達が元気で嬉しいわ」

エリザベスお母様は、私とよく似たウェーブのかかった金髪と綺麗な翡翠色の瞳の、女神のような容姿で優しく微笑んでいます。

両親だけが呼ぶ、私とお兄様の愛称である「天使」を今日も聞きながら、自然に頬が緩んでしまっています。

「明後日から二年目の学校生活が始まる。今年は、扱いづらいが大切な授業も行う。今のように毎日笑っていられる事を切に願うが……」

女神のようなお母様の隣で、短髪の赤毛が似合うアレクサンダーお父様が眉間に皺を寄せて難しい顔をしています。

お父様は、我がクリスタ王国が大陸に誇る賢王で、「太陽王」と諸外国で呼ばれるほど優秀で有名です。

その眉間の皺を眺めながら、お父様の心配事の多くを占めているのは、私が考えた二年目の新しい必修授業のせいなんだろうなと推測します。

「父上、そこまで心配しなくて大丈夫ですよ。反対も確かにありましたが、今はみな賛同を得られましたし、より国民の為になるはずですよ」

お兄様がフォローをしてくれましたが、お母様は心配そうに私達を真っ直ぐ見つめてきます。

「どんなによい行いでも、新しい事には反発や問題が起きるものよ。何かあったら自分達だけで解決しようとせずに、ちゃんと私達に教えてね。天使と天使ちゃんが優秀で、自分達で解決できるのは知っているけれど」

「お母様、ご心配ありがとうございます。何かあったら、ちゃんと相談しますね。でも、今年も楽

しみな事が盛り沢山です。新たに海産物の生産向上に取り組み予定もありますし、一日も早くトロシア帝国に行きたいですし……」

私がそう言うと、お父様が口を開きます。

「トロシア帝国への訪問の日程は、最終調整に入ったよ。来月には行けるだろう」

私の予想よりも早い日程を告げられて、さすがお父様だと感心してしまいます。

「なるべく早くとの我儘を叶えてくださって、嬉しいです」

お父様が湯気の立ちのぼる紅茶のカップを持ち上げながら、微笑みます。

私が普段行こうとお忍びと違って、クリスタ王国の王女であるレイチェルとして他国に訪れるには、とても沢山の調整や手続きが必要になります。

そんなお願いをしてから、たった三か月で実現してくれるお父様達には、感謝しかありません。

「僕もぜひトロシア帝国のチャールズ陛下には、また挨拶したかったです」

お兄様は、先ほどとはうって変わって、目が笑っていない笑顔で頷いていました。

「獣人のアーサーとテトは、同行するんだろう？ 二人なら護衛もしてくれるだろう」

「はい、お父様。それにトロシア帝国出身の双子、レオン様とルーク様はいわずもがなですが、他にジャンとラインハルト様も同行したいとおしゃっています」

ミスト共和国の元指導者、カイザラックの息子であるラインハルト様と、その友人のジャンもついていきたいと言っていたので、特別に同行する手筈を整えてもらいました。

「『修学旅行』として、他の生徒も受け入れてくれるとの事で、天使ちゃん以外にも問題なく訪問できるように話しているよ」

「ありがとうございます。トロシア帝国の問題はもう『お忍び』での小規模な介入では解決できない状況です。一刻も早く、国を挙げての抜本的な対策を講じないと手遅れになると思います」

「我が妹は、本当にお節介を焼くのが好きだね」

お兄様は、また目が全然笑っていない笑顔で微笑んでいました。

クリスタ王国を挙げての大きな政策であった学校運営は、順調に二年目を迎えようとしています。学校という仕組みがわかっていなかった一年目と違い、今年はある程度理解が広まり、土台ができたので先に進めそうです。

そこで次は、私がこの世界でずっと気になっていた事に手をつけようと思います。

まず一つ目は、魔法です。魔法がある世界なのに、魔法が全然発達していません。

魔法を使える人が少ないですし、使える人でも、大半は火と水を使う事しかしません。

それはなぜか？ と考えました。

私が思うに、その答えは、イメージできないものは魔法では再現できないからです。

多くの人は、目で見た事がないと、なかなか具体的にイメージできないのです。

せつかく魔法が使えるのに、もったいないなと思っています。

私だけ、前世の色んな知識やアニメや漫画のお陰で、様々な魔法を使い放題です。

でも、この世界の人も目で見ればイメージできるはずです。

なので、私がこの世界にはない色々な魔法を広めていこうと思っています。

特に治療魔法を、と思っています。

そして、もう一つ取り組んでいきたいのが医療です。

この世界にもお医者さんや薬師さんと呼ばれる人達がありますが、昔のヨーロッパの医療と似ていて、瀉血や民間医療をそれぞれ独自に行っているのが現状です。

まだまだ発展してなくて、様々な迷信を信じています。

前世の日本では、薬もそうですが、なんといっても医療技術がとても発達していました。

男性も女性も、平均寿命は八十歳以上で世界的にも高水準でした。

しかし、医療が中世ヨーロッパと同じ水準であるこちらの世界は、平均寿命が約三十歳です。

二十歳まで生き残るのは、半分ほどという確率です。二人に一人が二十歳までに亡くなります。

医療や公衆衛生が未発達なので、寿命は前世に比べて驚くほど短いです。

ここでは日本にいた時より、死を身近に感じます。

そんな経緯もあり、お兄様に魔法と医療に関して色々相談して、実現の為に沢山手伝わってもらいました。

「レイチエルは、本当に僕達にない発想があるね。まだまだやらなきゃいけない事が沢山あって楽しいよ」

「お兄様がそう言うてくださって、嬉しいです。全然違う世界だからこそ、いい方向に変えていきたいと切に思うのかもしれませんが。前世の国はこちらの倍以上の平均寿命で、なんと試験管で人工的に赤ちゃんのもとを作ったりもするんですよ？」

「とても想像できない、不思議な世界だね。科学という技術は、不可思議な魔法の力より、魔訶不思議に感じるよ」

「でも、そんな世界の人は、魔法を使えるならすべてを投げ出すかもしれないほど、その力に憧れているんですよ？」

「そうなんだね。でも、科学の方が、聞いていて可能性と魅力を感じるかな。僕が魔法に可能性を感じないのは、どれだけ修練を積んでも、己の思い通りにならず、感情に左右されるからなんだ」

「お兄様は、あまり魔法がお好きではないですよ？ せっかく使えるなら、利用できるだけ利用しそうなのに」

「そうだね。僕は、不確かな力に頼るのが好きではないからね。魔法を練習する時間を作るなら、その時間でもう一冊本を読む事を選ぶかな。それに、魔法の事はレイチエルが取り組んだ方が、いい発展をすると思うからね」

お兄様は優しく、私の頭を撫でてくれます。

この世界で治療魔法を使える人が増えたり、医療が発展したりすれば、絶望で泣く人が減るはず

です。

学校創立時も提案しましたが、繊細な問題があるので取り入れられませんでした。しかし、二年目は学校の評判が上がった為、新たな協力を得る事ができました。

治療魔法の為に、私が医術の中でもっともやりたかったのは、「解剖学」です。

前世では、大半の人は小学生の時に人体模型を理科室で見て、テレビでも医療ドラマを目にするし、レントゲンを撮ると骨がこんな風になっているんだと、人体について大体のイメージがありました。

でも、こちらの人は、それが全くないのです。

だからこそ、一度でも体の器官を見れば、人体に関する理解が全く変わるはずですよ。

この世界でも、どこかに解剖をした人がいたのかもしれませんが、遺体は埋葬するもので、遺体を切って開くなんて悪魔の所業というのが一般的な認識です。

でも、勉強したいと言い続けていたら、献体の申し出がありました。

これも全部、学校の信用を一年かけて積み上げたおかげですね。

日本の大病院みたいに、勉強する所に患者さんが来てくれて、治療と研究と一緒にできる場所に変えていきたいです。

一年しか通えないと騒いでいたアラールレ連合国の皇子であるサルーン様は、画期的なこの授業の為に、もう一年通っていいと許可をもらえたと喜んでいました。

サハラなどの問題が解決したので、連合国として余裕があるのも関係しているかもしれませんが、サルーン様との最初の出逢いは、獣人への酷い扱いを見た最悪なものでしたが、今は印象が変わって別人のように感じます。

サルーン様といつも一緒にいる、アラールレ連合国の外交官の息子であるサル君は、相変わらず変なところで笑う人です。

最近ではアーサーとテトまでサル君と一緒に笑うので、この三人は同じ笑いのツボを持っているのだと思っています。

一年目に色々あったラインハルト様は、相変わらず優秀で、話すのが楽しいですし、ラインハルト様の幼馴染のジャンは、「お忍び」についてくるのにも慣れて、色んな経験を共有しています。

さらに学校で仲良くなった、シエロ王国のキャロルとアンナは、食べ物の好みが一緒で、お菓子をよくくれます。それがとても美味しくて、お菓子を食べながらお喋りしていると時間を忘れてしまいます。

仲のいい女友達もできて、毎日楽しく過ごしています。

みんな二年目もヘリオス学園と一緒に通う事になって嬉しいかぎりです。

明後日からいよいよ、二年目の学校生活が始まります。

2. 解剖学じちゃいました

二年目の学校生活が始まって、早くも一週間が経ちました。今日はついに今年が目玉の必修授業、「解剖学」です。

この授業は能力別ではなく、学校の生徒が全員一緒に受けます。学年も関係なく、全校生徒が同じ教室にいます。

「レイチェル様、緊張してきますね」

キャロルが苦笑いで話しかけてきました。

「キャロル、アンナ、気分は大丈夫ですか？」

「緊張していますが、大丈夫です」

キャロルとアンナの事は呼び捨てで呼ぶほど、仲良くなりました。

二人共、一緒にいて癒されます。

私の事も敬称^{けいしょう}抜きで呼び捨てにしていると伝えていますが、二人は敬称呼びがいいとの事で、好きに呼んでもらっています。

キャロルはポリウムのある赤毛を三つ編みに編んでサイドに垂らしていて、その赤毛が制服の

白さに綺麗に映えています。

隣にいるアンナは、黒髪を低い位置でポニーテールにしている、その漆黒の髪が不安そうに揺れました。

アンナのぎこちない返答を聞いて、改めて部屋を見回します。

普段の教室とは違って椅子などはなく、中央の銀色の台に今は白い布がかけられています。

台の周りにはお兄様やラインハルト様、ジャン、サルーン様、サル君の他に、アーサーとテトもいます。

普段の授業ではあまり一緒になる事がない人も、今日は一緒にの授業です。

台を挟んだ向かいに、我が国の宰相^{さしやう}の娘であるヴァネッサ・クレイン嬢^{じょう}がいるのが見えます。

黒髪を優雅な巻き毛にしている吊り目の美少女です。

その横には、いつも一緒にいる女の子三人が立っているのも見えます。

いつもは離れていても話し声が聞こえてくるのに、今日は静かで緊張しているのが見て取れます。彼女達のすぐ前には、担当の先生が立っています。

そして、補助要員で他の教科の先生も参加していて、壁際にずらっと並んでいます。

具合が悪くなった人が出た場合に備えて、控えてくれています。

生徒と先生の間には、ふわふわのマットがぞくぞく運び込まれています。

バケツも人数分用意されています。

この授業を行う前に、参加してくれる先生方には事前に解剖学を学んでもらい、人間の臓器や血への耐性をつけてもらいました。

補助の先生達も最初は卒倒^{そつとう}したり、嘔吐^{おうと}したりしていました。

こちらの世界の一般の人は、大半が人間の臓器を見る事なんて初めてで、その衝撃は私には計り知れません。

日本の解剖学の授業では、吐いたり倒れたりする人は滅多にいないと聞いた事があります。

しかし、こちらは、「医学を学ぶ」という行為自体がない世界です。

「医学は伝える」という認識の方が近い気がします。

その伝えられている行為が、正しいかどうかの検証もなく。

もう、根本が違いすぎます。

今日の授業までには、ほんととーーーーーに長い道がありました。

臓器のホルマリン漬けや、先生達が作成した教科書で学ぶのでもいいではないか？ わざわざ実際

に見る必要があるのか？ などなど。

人は変化を嫌うのだと、実感しました。

特にヴァネッサ嬢の父であるクレイン宰相が、「全員ではなく選択の授業にするべきだ」と強く主張していました。

選択の授業にした場合、半数以上の生徒は自主的には受けないと思ったので、それではせっかく

の貴重な機会を失う事になってしまいます。

何年後かには選択の授業でもいいと思いますが、今は強制的にでも全員が受ける事が必要だと考えました。

その為には色々な準備が必要で、生徒の親御さんにも事前に連絡、承諾を取る為に手を回しました。

この辺はお兄様が手伝ってくれたので、よくわからないうちに上手くいきました。

そんな長い道のりを乗り越えて、念願叶つての本日の授業です。

色々な事があったので、この場に立つたら走馬灯のように思い出していました。

「では、これから解剖学の授業を始めます。まず、献体に感謝の祈りを捧げます」

先生の合図で祈りが捧げられます。

国によって宗教なども違うので、それぞれ祈りの仕方は違いますが、みんな一緒に感謝の祈りを捧げました。

教室の中は異様な緊張感で、誰も言葉を発しません。

解剖が始まると、真っ先にヴァネッサ嬢が倒れました。

数人倒れるだけなら、授業は続行する手筈になっています。

何人か倒れたり、嘔吐したりする人がいる一方で、全く動揺も見せずに真剣な顔つきで学んでいる人達がいいます。

お兄様、ラインハルト様、ジャン、サルーン様、サル君、キャロル、アンナ、アーサー、テトは先生の動きを一つも見逃さないように集中しています。

瞬きすらも極力しないようにしているみたいです。

周りの喧騒など、一ミリも聞こえていないようです。

他にも、トロシア帝国の双子皇子や、多くの女性陣は血にも慣れているからか、衝撃は受けている様子ですが、倒れずに真剣に学んでいます。

倒れた生徒を補助の先生が受け止めてマットに寝かせて、少しして起きてまた倒れてなど、周りはずいことになっています。

そんな周りの喧騒を物ともせず、先生は摘出した臓器の説明をしながら、丁寧にホルマリン漬けにしています。

筋肉や神経などはなるべくそのままにして、骨の位置や臓器の位置、人間の身体がどんな作りになっているのかが、主に話されます。

あつという間に授業終了の時間になりました。

最後も献体に感謝の祈りを捧げて、授業の幕は閉じました。

私は、授業が無事に最後まで行えて、とりあえず上手くいったと胸を撫でおろしました。

この授業は午前中の三限全部を使った授業なので、次の時間はお昼ご飯となり、食堂に移動したのですが……今日はいつものように食堂に人がいません。

みんな、庭園や木陰でぐったりしています。

食堂は貸し切り状態で、私、お兄様、ラインハルト様、ジャン、サルーン様、サル君、キャロル、アンナ、アーサー、テトでお昼ご飯を食べる事になりました。

3. 怒らせちゃいました

普段、私とお兄様は別々にご飯を食べているのですが、今日は限られた人しかお昼ご飯を食べないので、一緒に食べる事になりました。

他の食べられそうな方にも声をかけましたが、断られてしまいました。

「カイルお兄様と学食をご一緒するなんて、初めてですね」

「そうだね。僕らは一緒になる事、普段はないからね」

お兄様は向かいの席で、優しく微笑んでいます。

「お二人が一緒にいると、太陽神の兄妹のようですね！ とっても神々しいです！」

「キャロルのたとえば大袈裟ね。みんな“解剖学”の授業はどうだった？」

「衝撃的だった。人間の身体の中というのは、あのようになってるのだな。とても勉強になった」

私が問いかけると、サルーン様がカレーを食べながら、真剣な顔で答えてくれました。

「俺も切断された断面は見た事あったけど、身体の中ってあんな風になっているんだな」

ジャンは、癖のある赤髪を揺らしながら答えてくれます。

「ジャン、一言多いよ……とても勉強になりました。やはり、本だけの知識ではわからない事が多くありますね。とても意義のある、素晴らしい授業だと思いました。貴重な機会をただけて、光栄です」

明るい栗色の髪と綺麗な金色の瞳の端正な顔立ちのラインハルト様が、ジャンの脇腹をこづきながら質問に答えてくれます。

「ジャンって、いつも一言多いですよね」

黒い瞳でジャンを見つめながら、テトはサンドイッチを手で押さえてぼそっと呟きます。

ラインハルト様とテトが、冷たい目でジャンを見ている。

私もテトの発言に、完全に同意します。

「そーなの！ それに、ジャンって一番年上なのに一番年下みたい」

「一番年下のお嬢にそんな風に言われるなんて、ジャンて、残念かてヤツなんだな？」

私の発言を拾って、アーサーは、銀髪と灰色の瞳が輝く顔を傾けて、ジャンに問いかけます。

「残念かてなんだ？ レイチェル様にたまに言われるが、意味がよくわからないんだが……」

ジャンが食べているオムライスをスプーンですくうのをやめて、質問を口にしします。

「俺も昔言われた事がある。どういう意味なのか聞いたが、教えてもらえなかった」

サルーン様も、食事の手を止めてこちらを見えます。

「レイチェル様、たまに言いますよね？ 残念美少年 って」

アンナが可愛い顔で首を傾げます。

そういうえば、昔サルーン様には目の前で「残念美少年」って言った事があったなと思い出しました。

「えっと……私が作った言葉で、意味を聞かれると困るので……聞かなかった事にしてもらえると助かります」

私の歯切れの悪い返答に、ジャンがしゅんとしてしまいました。

「残念美少年 って、いい意味じゃないだろう？」

ジャンはこのメンバーの中で一番年上の十八歳だし、見た目もワイルドイケメンで、体格もいいのに、その姿が子どものように見えて、たまに弟と思ってしまうのは、なんなのでしょうか。

不思議でしょうがないです。私の中の七不思議の一つかもしれない。

「ジャン！ そんなに気にしないで！ 最近はそんな風に思っていないから。可愛い弟だと思つていいから！」

励まそうと、私はジャンに声をかけます。

「なんで弟なんだよ！ お兄ちゃんだろ！」

ジャンは否定しましたが、お兄様とキャロルとアンナは私の発言に同意して、頷いています。

「確かにレイチェルの言う事がよくわかるよ。僕もたまに、ジャンの事を弟だと思ってしまうからね」

「カイル様までそんな事言うなんて……年上の俺の立場がないですよ」

またジャンが、しゅんとしてしまいました。

「ジャンは、カイル様に色々迷惑などかけているのではないですか？」

ラインハルト様が、ジャンのお兄ちゃんみたいに心配を口にします。

「迷惑は、かけられていないですよ。ジャンはレイチェルと似ているので、見ていて楽しいですし」

ええ!? 私って、ジャンと似ているの？ お兄様の発言にビックリします。

「レイチェル様って、ジャン様と似ているんですか？」

サル君も持っているスプーンを置いて、驚いています。

他の人も同じように、驚いた表情をしています。

「みなさんは似ているって、思った事ないですか？」

お兄様の微笑みながらの質問に、みんなそれぞれ考えている様子です。

「確かに、似ているところもあるかもですね」

「待ってください、ラインハルト様！ どの辺が似ているんですか？」

ジャンと一番親しい人に似ていると言われて、なぜかわかりませんが、制止の言葉が口から出ていました。

ラインハルト様は、顎あごに手を当てながら答えてくれます。

「私が似ていると思ったのは、思っている事が顔に出るところでしょうか？」

えー!? 私、格好いいボーカークフェイスを目指しているのに……その言葉に驚愕きょうがくします。

「そういう意味では、見ていて似ているかもしれませぬ」

キャロルにまで顔に出ていると言われたら、もう認めるしかありませんね。

「美味しい食べ物を目の前にした時のお嬢の顔とか、笑えるくらいへによへによだしな。その時だけ、年相応に見えるもんな」

アーサーがからかっている声で笑っています。

「レイ様は、美味しいものに目がないだけですよね。ジャンのそれとは違うと思うのですが」
テトが否定してくれて嬉しいです。

「二人が似ていると思っている特徴は、そこじゃないんですけど。機会があったら教えますね」

お兄様はジャンと私の何が似ているか、結局教えてくれませんでした。

ジャンはなぜか喜んでる様子です。

彼はもう十八歳なのに、そんなに年下ポジションでいいの？ とその姿を見て疑問に思っています。

ワイルドイケメンな成人男性なのに、七歳の少年と五歳の少女に弟と言われて……それでも嬉しそうなジャンを見つめてしまいます。

ふと、初めての解剖学が終わった後なのに和気あいあいと会話を楽しんでいた、普段通りにご飯を食べられているみんなが、すごいなと思いました。

どんな精神力をしているのでしょうか？

実を言うと、私も食欲がいつも通りあるわけではないので、スコーンと紅茶だけにしています。気になったので、キャロルとアンナになぜ平気なのか質問してみました。

「私達は、牛などの家畜動物の出産を手伝った事がありますし、勉強として学んだので、食欲がなくなるというのはないですね」

キャロルが笑顔で答えてくれて、なるほどと納得しました。

その後も楽しく会話しながら、スコーンを半分ほど食べ終わった時、吊り目の美少女が私達に近づいてきました。

「レイチエル様!! 一言よろしいですか?」

現れたのは、ヴァネッサ嬢です。

取り巻きの少女も引き連れて、怒りを微塵も隠さずに私達の前で仁王立ちしました。

隣に座っていたキャロルとアンナも食事の手を止めて、一緒にヴァネッサ嬢に視線を向けます。

「先ほどの授業は、なんなのですか!? あの授業を全員でやる意味がありますか?」

すごい剣幕で捲し立てるのは、授業の苦情のようです。

ヴァネッサ嬢は、今までも学校について、ちよくちよく苦情を言いに来てくれたけど、こんなに怒っているのは初めてです。

ちゃんと苦情も真剣に聞きます。改善点は、沢山ありそうですもんね。

何事も否の意見をちゃんと聞かないと、よくなりませんからね。

「ヴァネッサ嬢。貴重なご意見ありがとうございます。ですが、なぜそんなに怒ってらっしゃるんですか?」

「あんな悍ましい行為を、淑女に見せる意味がありますか?」

「なるほど。はつきり言うところある」と私は、思っています」

「あるですって!? 私が無様に倒れたのも、ぜんぶあなたのせいですからね!」

なんだか今の発言から、倒れたのを見られたくない人でもいたのかもしれないと思いました。怒っているのは、恥ずかしかったのもあるのかもしれないと、その様子から推測しました。

それなら、大変申しわけなかつたです。

「無様な姿を、あの方に見られたのかと思うと……」

目の前の私でも聞き取るのがやっとの小さい声で、ヴァネッサ嬢が呟きました。ヴァネッサ嬢、それは恥ずかしかつたですよね。

でも、解剖学の授業を男女別にする必要性はないと思います。

複雑な乙女心には申しわけないですが、配慮する場面ではないと考えてしまいます。

「私の父が申したいように、選択の授業にするべきですわ！ あんな悍ましいもの、見たくない人に見せるなんて、拷問くわもんと一緒ですわ！」

うーん。拷問とまで感じる人がいるなら、配慮が足りなかったと考えなおします。

「確かに何年後かは、選択の授業でもいいとは思っていますが、現状では全員に受けてもらうのが一番効率的でよい、と思っているんですよ。でも、拷問とまで感じる方がいるなら、ある程度の配慮を考えないといけませんね」

「そうでしょう！」

「ちなみにあの授業を受ける意味を、ヴァネッサ嬢はわかっていますか？」

「医療技術の向上の為にしょう？ だからこそ、全員でやる意味がないと父も言っていたじゃない！」

「今年の入学式の理事長の話は、お聞きにならなかったですか？」

「……理事長の長い話なんか、覚えていませんわ」

「医療技術向上もそうですが、医療従事者じゃない人でも、誰か身近な人が倒れた時、その知識があるのとないのでは、大きく変わってくる。それは全員の為になるはずだと理事長は話していました。確かに解剖学は、シヨックを受ける方もいると思います。でも、その知識がゼロの現状で、ヴァネッサ嬢がその大切な最初の一步になるという事は、意味があると思います。大切な知識を学

べる場所にいるなら、今は全ての人がその最初の一步になるべきだと思っています。しかし、拷問とまで感じる方がいるなら希望者は他の授業を受けられるなどの対策を、帰ったらすぐお父様達に相談してみますね」

「そうしてください！ 私はもう絶対、あの授業を受けたくありませんから！」

「わかりました。ヴァネッサ嬢、貴重なご意見ありがとうございます。お兄様はお話を聞いて何か他の対策を思いつきますか？」

自分一人の意見で進めるわけにもいかないので、いつものようにお兄様にも意見を伺うかがってみます。「うん。レイチェルが言ったように、希望者には違う授業を受けてもらうのが一番いい解決方法じゃないかな？」

すると、ヴァネッサ嬢は私の向かいにお兄様が座っている事に気づいて、とても驚いている様子です。

私が、お兄様と一緒にお昼ご飯を食べている事なんてなかったのに、まさかいると思っていなかったのでしょうか。

外からは、食堂の中に誰が座っているのかわからず、手前の席に座っていた私、キャロル、アンナしか見えていなかったのだと思います。

それに加えて、ヴァネッサ嬢は怒りもあって、私しか見えていなかったと推測します。

他の人なんて、視界に入っていないようでした。

ヴァネッサ嬢の目線がお兄様から、その奥に座るアーサー、テト、ラインハルト様、ジャン、サル君、サルーン様とゆっくり動いていくのが見えます。

そして、サルーン様の所で視線が止まると、顔がさっきより赤くなりました。

「サ、サルーン様も、ご一緒していたのですか？」

その様子から直感的に、ヴァネッサ嬢はサルーン様の事が気になっているんだと推測しました。ジャンを見た時も頬を少し赤くしていたので、ヴァネッサ嬢はワイルド系が好きなのかもしれません。

サルーン様の容姿は、色黒の肌に艶やかな黒髪が腰まであり、毛先が特徴的なグラデーシヨンの赤髪で、アラレ連合国の装飾品がその髪をより綺麗に、色鮮やかに彩っています。

十二歳とは思えない色気も醸し出しています。

ジャンも見た目だけなら、赤毛のワイルド系のイケメン青年なので、外見でキュンとするのもわかるなど心の中で賛同しました。

ワイルド系ならアーサーも同じ系統だと思いましたが、ヴァネッサ嬢は特に反応していなかったので、頭を捻ります。

ちなみに、サル君とテトとラインハルト様とお兄様が同じ系統だと思っています。

いわゆる、王子様系というやつです。

サルーン様は、ヴァネッサ嬢の剣幕に圧倒されたのか黙っていました。名前を呼ばれて口を開

きました。

「ヴァネッサ嬢やみなと一緒にせっかく同じ授業を受けられる貴重な機会なのに、もうご一緒できないとなれば、寂しいな」

少し困った苦笑いでサルーン様が言うと、ヴァネッサ嬢は顔を真っ赤にして俯きながら、小さな声で何か言っています。

今度は小さすぎて、聞き取れなくて席から身を乗り出して、耳を近づけます。

すると、ヴァネッサ嬢は急に顔を上げ、素早い動きで私の腕を掴んで食堂の外に引っ張り出しました。

「先ほどの発言は、一旦取り消します。みなと一緒に解剖学の授業を受けます」

息を乱しながら私の耳元で宣言すると、無理やり掴んでいた腕を離してくれました。

恋する乙女って、こんな簡単に意見変えちゃうんですか？　と思わず啞然として彼女の顔を凝視してしまいます。

先ほどの話は、いったいなんだったのでしょうか？

まあ、サルーン様の一言でやる気になってくれるなら嬉しいですが……

いや、果たしてこの流れはいい事なのでしょうか？　と疑問に思っています。

思わずヴァネッサ嬢に聞き返しました。

「え？　もう大丈夫なんですか？」

「先ほどの事は、聞かなかった事にしてください」

そう言うと、そそくさとヴァネッサ嬢とその取り巻きの少女達は、去っていききました。なんとという、突然の嵐でしょう。

食堂に戻ると、みんなが一緒にサルーン様を見ていました。

私は、事の顛末を報告します。

「さっき言った事は取り消した、一緒に授業を受けるそうです」

みんなの視線に気まづくなったのか、サルーン様が咳払いせきばらいをして話し出します。

「ああ言うしか、ないだろう？」

サル君はサルーン様の隣で、苦笑いを浮かべています。

うーむ。私は、ふといつも気にならない事が気になりました。

ジャンやアーサーが女性に言い寄られている場面は、よく目にします。

年齢的に、テトとお兄様と私はまだですが、あとのメンバーは、絶賛恋愛適齢期です。

そういえば、恋話を、キャロルやアンナにも聞いた事がなかったなと気づきます。

「サルーン様って、好きな人とかいるんですか？」

私の唐突な発言に、その場の全員が食べていた物を、口から発射しそうになりました。

その光景に、みんな普段は行儀がいいし、作法も完璧なのにどうしたの？ と驚きます。

今まで恋話をした事がなかったので驚いたとしても、予想より大きな反応に戸惑います。

聞かれたサルーン様が、一番焦っている様子です。

お兄様は肩をブルブル震わせて、本気で笑っています。

家族以外の人の前で、本当に笑うなんてとても珍しいです。

少し前に、恋の話はみだりにしてはいけない、とお兄様に注意されましたが、笑っていると
いう事は、今はいいタイミングなんだと解釈しました。

「お嬢、いきなりどーしたの？ そんな事、今まで聞いた事ないじゃん」

アーサーが不思議そうな表情で聞いてきます。

「うん。私やテトやお兄様はまだまだ適齢期じゃないけど、他のみんなは適齢期だし、好きな人と
かいるのかな？ て、ふと疑問に思っただけ。キャロルはいる？」

サルーン様が答えてくれなかったので、隣に座るキャロルに質問してみます。

キャロルは顔を赤くして、チラッとラインハルト様の方を盗み見ました。

おぉー、なんて事だと愕然がくぜんとします。こんな身近にロマンスがあったなんて。

サルーン様じゃなくて、ラインハルト様にすべき質問だったのかと興奮してきました。

次にアンナを見ると、チラッとサル君を盗み見て、教えてくれました。

ええー、聞いた事なかったけど、ここにもそんなロマンスがあったなんて。

私は二人の手を掴むと、無言で力強く頷きました。

うんうん。心から応援する。なんていったって私は、恋愛結婚応援隊なので。

男性陣は私達の行動のわけがわからないようですが、向かいに座っているお兄様だけは、わかった様子で笑っています。流石さすがです。

私は改まって席に座りなおすと、目の前の問題に再び挑む事にしました。

「で、サルーン様やサル君、ラインハルト様は、好きな人いますか？」

「さつきより聞く人が増えているし。なのになんで俺には聞かないんですか？」

「ジャンは、適当に遊んでいるのを知っているから、興味ないもん」

アーサーが私の言葉を聞いて、笑っています。

「笑っているアーサーも、言い寄られて相手しているの、見ているからね？」

お腹を抱えて笑っていたアーサーは、キョトンとした後に、こてんと首を傾げます。

「俺はお嬢の事を愛しちゃってるから、誰に言い寄られても関係ないよ」

全員ビククリ顔でアーサーを見ているけど、これは冗談を言っている時の顔なので、からかっているだけだろうと、私は呆れてその顔を見返します。

テトも同じように、呆れた顔をしてアーサーを見えています。

続いてサル君が助け舟を出すように、苦笑いを浮かべながら先ほどの質問に答えてくれます。

「私は、好きな女性っていないですね」

「そうなんですか……じゃあ、サル君の好ましいと思う女性って、どんな人ですか？」

サル君は、考える素振りをした後に口を開きます。

「話が合う方ですかね？ 話が全く噛み合わない方って、いるじゃないですか……そういう方は苦手ですね」

「なら、キャロルやアンナは、好みのタイプって事ですか？」

「そんな！ 私なんかがお二人となんて、恐れ多いですよ！ お二人は、とっても素敵な女性だと思います。自分には、高嶺たかねの花ですよ」

ちよっと頬を赤くして手を左右に振るサル君の反応が、とっても可愛らしいです。

かたやサル君の返答を聞いて、アンナの顔の赤さが尋常じゃなくなっています。

「じゃあ、ラインハルト様はいかがですか？」

「私はそのような感情が、恥ずかしながらこの歳でまだわからないんですよね」
困ったように、笑っています。

なんだか遊んでいる青年チーム以外は、みんな恋愛に疎とろいみたいです。
なるほど……最後にサルーン様に再度質問を聞き直します。

「で、サルーン様はどうなんですか？」

「好んでいる相手はいる。だが、その相手が誰かは、絶対言いたくない」

なんですって!? サルーン様は好きな人がいるんだと、その返答に驚きます。

「この話は、これくらいにしましょう！」

サル君が珍しく、話に割って入ってきました。

「そーそー！ お嬢も好きな人がいるか聞けて、気が済んだでしょ？」

アーサーもサル君に同意して、この話を終わらせようと必死になっているようです。

その態度から、二人はサルーン様の好きな相手が誰か知っていると感じました。

なんだか、私だけのけ者のようで寂しいです。

「二人はサルーン様の好きな人が誰か知っているんですか？ なら、私にも教えてくれてもよくないですか？」

頬を膨らませて、口からは思わず抗議の言葉が出てしまいます。

すると、サルーン様がバンツと食堂中に響く大ききさでテーブルを叩くと、勢いよく立ち上がりました。その大きな音にビックリして、体が反応してしまいました。

怒ったような表情でサルーン様は食堂から去ってしまいました。

あれ？ これって、私、何かやらかしたかも？

サル君が私達に一言謝って、サルーン様の後を追っていきます。

他の人達は、気まづげな表情で、苦笑いしています。

「レイチエル様って、人の気持ちとかすぐわかる人なのに、恋愛面は壊滅的なんですわ」

「お嬢は、そこだけはいつも空気が読めないんだよな」

「あれだけ注意したのに、今のはレイチエルが悪いと思うな」

「レイチエル様も、残念 かってやつなんじゃないですか？」

「レイ様……今のはちよつと」

キャロル、アーサー、お兄様、ジャン、テトまで……確かに無神経だったと反省します。

アンナもラインハルト様も、苦笑いを浮かべたまま私を見つめています。

私、サルーン様を怒らせてしまったようです。

4. 仲直りしちゃいました

それからしばらく、普段はよく話したり遊んだりして、仲のよかったサルーン様が、私と顔を合わせても、ぷいっと顔を背けてどこかに行ってしまうようになりました。

話しかけようとしても、足早に去っていきます。

そんなこんなで、仲直りのタイミングを見つけられずにいました。

そういえば、レイチエルとして過ごしてきて、誰かとこんな状態になったのは初めてです。

前世でも友達と喧嘩けんかなどした事はありませんでしたが、その時は携帯電話のメッセージで謝ったり、電話にかけて謝ったりしていました。

そのようなツールがない場合はどうしたらいいのかわからず、途方に暮れてしまいます。

しかし、この世界にも手紙という古典的な手段があると思いなおし、謝罪の手紙を書いてサル君

に託す事を思いつき、すぐに実行しました。

意外な事に、サルーン様からは次の日に返事をもらえました。

手紙の内容を要約すると、怒っていない。ただ、暫くは顔を合わせづらいので、気にしないでくれ。みたいな事が書かれていました。

うーむ。怒っていないならどういふ事なのかと、謎は深まるばかりです。

アーサーとテトに相談したところ、時間が解決すると言われるし、お兄様も同じ回答でした。

離れのリビングの椅子に座りながら、私は手を組んで祈っているような姿勢で話します。

「時間が解決するんだよね？」

「そうそう。これに懲りたら、恋話はお兄ちゃん王子に注意されたみたいに、考えなしにしない事だね」

アーサーに釘を刺されてしまいました。

「俺には、いつでも恋話してくれて大丈夫ですよ」

その言葉に顔を上げると、ジャンが満面の笑みで手を広げていました。

ジャンみたいに気にしない人もいるけど、これからはもつと人とタイミングを考えて恋話をしようと思ひました。

それからサルーン様と仲直りはできていなかったですが、キャロルとアンナと恋話の続きをしたら、二人がとっても可愛くて、荒んだ心が癒されました。

恋話ってこんなに盛り上がるんだ、と衝撃を受けました。

今までは食べ物の話しか興味がなかったですが、新しいジャンルが私の中に追加されました。

誰彼構わずしないで、考えて話せれば、とても楽しい話題です。

サルーン様の事は、キャロルとアンナも一緒に悩んでくれたのですが、やはり解決法は見つけられなかったです。

そんな喧嘩？ みたいな状態が続いて一週間経った夜に、いつものように部屋から抜け出して離れに行くと、サルーン様とサル君がいました。

先日アーサーとテトに相談したので、二人が仲直りの機会を作ってくれたのかなと、期待します。ひとまず離れに入らずに、外でドアに耳を当てて、盗み聞きしちゃいます。

「言っとくけど、お嬢は察するとかいう能力は皆無だから、諦めた方がいいよ」
アーサーの声です。

「しかし、なぜか話そうと思っても恥ずかしくなって逃げてしまうんだ」

答えたのは、サルーン様です。

「その照れが無駄だと言ってんの！ なっ、テト？」

「うん。仲良くなると、レイ様は距離感がおかしいから。諦めるか、耐性をつけないと一緒にいけないよ？」

なんか、気のせいかな、アーサーとテトが私の愚痴を言っていますか？

「お嬢は未だに、俺やテトの寢床に潜り込んでくるからね？」

「えっ？」

サルーン様とサル君、ダブルサルーンで息が合っています。

「暗殺者が来る気があるからとか、雷が怖いからって寢床に忍び込んでくんの！」

「ぎゃー！ 私の恥ずかしい話をしています。」

今すぐ出て行って、アーサーの口を塞ぎたいとドアノブに手をかけます。

「あと、疲れた時とかよく俺を抱き枕にして寝ているよ」

テトの続いて出た言葉に、ドアノブを回そうとした手が止まってしまいます。

二度目のぎゃー！ が、声にならない声で心の底から出てきます。

私の恥ずかしい秘密を、二人がなんでダブルサルーンに話しているのか理解できません。

「そんな事があるのか。では、この一年はもつと忍耐力をつけなさいといけないう事なんだな？」

サルーン様が、真剣な声色で答えています。

「そうだよ！ 初月でそんなんでどうすんだよ！ とりあえず、お嬢入ってきなよ！」

アーサーに突然呼ばれたので、おずおずと先ほどから回そうかと手をかけていたドアノブを回して、離れに入っていきます。

え？ このタイミングで呼ぶの？ その疑問が顔に出ていると思います。

「慣れるしかないんだよ！ サルーン、もう諦める。お嬢はそういう人なんだよ！」

アーサーが説得している風だけど、とても失礼な事を言われている気がしてしまいます。

サル君は、可哀想な子を見る目で、私とサルーン様を見えています。

そこで、サルーン様が意を決したように、私の方に振り向いてくれました。

久しぶりにサルーン様を私を見て逃げないので、嬉しくなって笑顔で近寄っていきます。

「くっ」

なぜかサルーン様は、苦しそうに胸を押さえ始めました。

「耐えるんだ！ 慣れるんだ！ 大丈夫！ サルーンならやれる！」

アーサーが拳を握って励ましています。テトも応援している様子です。

最近のこの四人の仲良し具合が、本当に羨ましいです。

出逢った時は、今のこの様子が考えられないくらい殺伐としていたのに。

「えっと、手紙だけで直接謝れなかったの。私が無神経でごめんさい。これからは気をつけますから、以前のように仲良くしてくれると嬉しいのですが……」

私が恐るおそる言うのと、黒と赤色の美しいグラデーシヨンの髪が目の前で揺れ動きます。

「いや、レイチェルが謝る事はない。私の方に問題があったただけなんだ。逆に気を揉ませてしま、すまなかった」

そう言ってサルーン様が久しぶりに、私を見て笑ってくれました。

その表情を見て、胸を撫でおろしました。許してもらえたみたいでよかったです。



最近の心のしこりがなくなりました。

私は嬉しくなって、思わずサルーン様に抱きついてしまいました。

サルーン様は、私からの勢いがある抱擁を、微動だにしないで受け入れてくれました。

頭の中は大人な部分があっても、身体が五歳の子供だと行動が身体に引っ張られるみたいで、幼い行動をとってしまいます。

抱きついたり、テトを抱き枕にしたり、雷が怖くてアーサーのベッドに潜り込んだりするのも、その影響だと思っています。

自己分析では、そう思っています。きっと、間違っていないと思います。

だって、前世だったら雷を怖いなんて思った事ないですもん。

目の前のアーサーもテトもサル君までもが、やれやれと呆れた顔で私達を見えています。

そこへ扉が勢いよく開いて、ジャンが乱入してきました。

「これ、どんな状況？ やっと、仲直りできたんですか？」

「うん！ はあく。最近の悩みが解決できて嬉しい！ 今日のお忍びは、いつもより頑張れる気がする!!」

私はサルーン様から手を離すと、離れの自分の部屋に向かいます。

部屋に入るといつものようにワンピースに着替えて、外見を十七歳くらいに変える《変身》の魔法を自分にかけます。安定の「お忍び」スタイルです。

最近の悩みが解決して、自然とウキウキして足取りが軽くなります。サルーン様と仲直りできて、本当によかったです。

嬉しいので、今日は誕生日にサルーン様からもらったお気に入りのお服、素晴らしいピアスを装着します。

上機嫌で部屋を出ると、五人はうんうん頷き合っていて、ダイニングにある椅子やソファに座りもしないで、立ったまま話をしています。

「寝床に忍び込むなど、恐怖ではないな」

「テトの方が可哀想だろう。ぎゅうぎゅうに、抱きしめられるんだぞ！」

サルーン様の言葉に、アーサーが返します。

「無意識と一緒に歩く時、手を繋いでくるのはなんなんだろうな？」

「あと、《変身》をして夜の街にいる時、どれだけ自分が狙われるのか無意識なのは、どうしてもなんでしょうか？」

さらに続けたサルーン様の言葉には、サル君が別の問題を挙げます。

「あれで前は一人で出掛けていたんだから、怖すぎるよな」

「なんでカイル様は、その辺の指摘をしないんですかね？」

「前聞いたら、面白いからって言うていたぞ。その辺の勉強は大人になってからでいいんじゃないかなって笑ってた。最低限の注意はしているからって」

ジャンがそんな事聞いていたなんてびっくりです。

「見た目と行動がアンバラスなの、どうにかなりませんかね？」

何やら私の愚痴？ で盛り上がっているらしいです。テトも同意していてショックです。

「ちよっと！ 私の愚痴で、盛り上がりたくないでください！」

全員が振り向いて同じように、大きなため息をつきました。

「成人である十四歳になったら、いったいどうなってしまうんだろうな」

ジャンが顔を引き攣らせています。

その言葉に全員が、力強く頷いていました。

その様子を見て、私は釈然としません。

どういう意味ですか？

お子ちゃまずぎるって事ですか？ いいじゃないですか。まだ五歳だもん。

5. クリソ活動しちやいました

サルーン様と仲直りして、やっと平和な学校生活に戻ってきたかと思いましたが、そんな事はありませんでした。

二年目である私達は、もうほとんどの必修単位を取り終えているので、新入生より時間の余裕があります。

その為、興味のある授業を好きに取れるので、私は大好きな語学の授業を中心に受けています。実は語学について、ペンネームを使って本も書いたりしちゃっています。

また、二年目の生徒の為に専門分野の授業の増設、クラブ活動、生徒会活動も始まっているので、時間が許す限り新しい活動の準備などに取り掛かっています。

クラブ活動は、私が主催のクラブも一つ作りました。

その名も、せかいちゅうしやう「世界向上クラブ」です。

この仰々しい名前のクラブが取り組む内容は、様々な分野を想定しています。

この世界がよりよくなるように取り組むという、とても壮大な目標のクラブです。

勧誘の為に、掲示板にポスターを貼ります。

他のポスターは演劇クラブや美術クラブなど、先生が主催のクラブが多いです。

キャロルとアンナが手伝ってくれて、背の低い私には届かない場所に手作りしたポスターを貼ってくれます。

「キャロル、アンナ、わざわざ手伝ってくれてありがとうございます」

「いえ、レイチェル様の役に立てるなら嬉しいですよ」

クラブに何人集まってくれるのか不安です。せつかくなので、なるべく多くの人が集まってくれ

ると嬉しいです。

三日後の初めてのクラブ活動の日。

クラブ活動の為に借りた教室に行ってみると、お兄様、サルーン様、サル君、ラインハルト様、ジャン、ヴァネッサ嬢達、トロシア帝国の双子皇子など沢山の人が座っていました。

ざっと教室を見渡しただけでも、相当な人数が集まっています。

空席が見当たらないほど集まってくれて、嬉しくなります。

こんなに怪しい名前のクラブなのに、大勢集まってくれるなんて感激です。

私は担当してくれる先生に挨拶してから、教卓の前に立ちました。

「本日は、世界向上クラブ」に参加くださり、ありがとうございます。心からの感謝を。このクラブでは、あらゆる事に取り組み、この世界の水準、常識を向上させようと思っています！」

お辞儀をして、ゆっくり顔を上げます。

すると、一人の生徒の手が上がりました。

「具体的に、どのような事柄に取り組む予定ですか？」

「その質問に答える前に……このクラブは秘密クラブとさせていたがと思います。ここで起こる事を、外部に他言できない魔法契約を、みなさんに結んでいたがと思います。それが嫌な方は、今この教室から、退出していただきたいです」

教室の中で、大きな騒めきが起こりました。そりやそうですよね。

「活動内容が外部に明かされないなら、世界の向上にはならないのでは？」
どこからともなく声が上がります。

「その指摘は、尤もです。いずれは外部にも開示しますし、そうでなくても、外部に他言しなくても私達がする行いで、世界の向上を図っていきたくと思っています」

みんな戸惑いの表情で、近くの人と顔を見合っています。

お兄様はその様子を後ろの席で、悪い顔で笑っています。

何人かは、やはり部屋から出ていきました。

ですが、予想していた人数より、出ていく人は少なかったです。

教室を改めて見回します。

私が主催するクラブで、魔法契約をする価値があると思っっている人がこんなにいてくれて、改めて嬉しく思いました。

用意していた魔法契約書を、前の席から回していきます。

私はみんなが書き終わるまで待つて、全員の名前を確認してマイ鞆かばんに入れます。

「では、最初の質問の回答ですが、まずは、最低限の治療魔法をみなさんが使えるようになっていただきたいと思っています」

先ほどより大きい騒めきが、教室に広がりました。

「お言葉ですが、ここにいる全員が魔法を使えるわけではないので、それは実現不可能だと思うのですが？」
思わずといった感じで、一番前に座っていた人が口を開きます。

「いえ、実は、この世界のほとんどの人は魔法を使えると思います。ただ、使い方がわかっていないだけで。今、みなさんが思っている、魔法が使えるのは王族、貴族の一部の人だけというのは、みなさんの中のイメージがそうさせているのです」

騒めきが、一層大きくなりました。

「私は現に、魔法を使えないのですが……」

クリスタ王国の貴族である、ガーデン様が手を上げました。

私はその青年の手を引き、席から立たせると、教卓の横に連れてきます。

そして、手を繋いだまま身体に魔力が巡るイメージをします。

先生が用意してくれていた、水差しとコップを教卓の上に置いて水を注ぎます。

「ガーデン様、同じように手からこの水が出てくる事をイメージしてみてください」

彼は私に言われて、戸惑いながら手をコップにかざして、力を入れました。

その瞬間、ガーデン様の手のひらから水が流れ落ちます。

ガーデン様は驚いて、後ろに倒れて尻餅しりもちをついてしまいました。

そのままの姿勢で、先ほど水が出た自分の手を持ち上げると、二度見しました。

そして彼の頬に、一筋の涙が伝いました。

「そんな？ まさか！」

部屋の中が騒めきではなく緊張に支配されて、先ほどまでの空気から一変しました。

教室にいる全ての人が、教卓に注目しています。

「魔力を持つていても、その流れが止まっている事がほとんどです。その魔力の『詰まり』を取ってあげると、魔力がゼロの方以外は、魔法を使えます」

震える声でガーデン様が、私に話しかけてきます。

「これは、世界向上とか……クラブ活動の枠を逸脱していると思うのですが」

「これを私的なクラブ活動でやる事に、意味があると思っと思っています。この先どうなるのか、私にもわかりません。でも、世界を変える責任は取るつもりです」

「レイチェル様！ これはすぐに全世界に発表すべき事ではないのですか？」

「いきなりこのような事を言われても信じられないでしょうし、どんな影響が出るか、それこそわかりません」

「しかし、みなが魔法を使えたら、それだけこの世界は発展するのではないのでしょうか？」

「確かに色々な事が発展しますが、その分問題も同じだけ起きるでしょう。今はその全てに対応できないと判断しました」

私は、教室に座る全ての人の目を一人ずつ見ます。

「元々使っていた人、使えていなかった人、全ての人の世界を私は壊してしまうでしょう。なぜそんな事をしようと思ったか……力は力しかありません。その力が必要な時、力がなかった為に後悔してほしくないのです。例えば、包丁は野菜を切って美味しい料理も作れますが、同じ包丁で人を傷つけたり殺したりもできます。なぜ今回このように不特定多数、国も様々な方にこの話をしているか。それは、その選別を私がすべきではないと感じたからです。不安な方は今からでも、この場から退出していただいて結構です」

そうはつきりと伝えると、今度は誰も席を立ちませんでした。

6. 魔法を教えちゃいました

「まずは、今魔法が使える方、使えない方に分かれてもらっていいですか？」

教室の中が半分、半分ほどに分かれました。

「使える方が、使えない方の手を握ってみてください」

「魔力を水の流れのようにイメージして、相手の身体の隅々に流すようにしてみてください」

「目を開けて相手の身体を見ながらやる方がやり易いと思います。ゆっくり……」

私は一組ずつ、繋がれている手の上に手を重ねて、上手く流れていない人には魔力を流します。

組になっていない人には、私が魔力を流しました。

魔力が一度は全員に流れたのを確認してから、みんなに向けて喋ります。

「今のイメージが基本になります。これは、治療魔法の基本にもなりません。今のように身体の隅々まで魔力を流して、怪我や悪い所を見つけます。治療魔法の時は、解剖学で見た身体の臓器を隅々まで頭の中で思い出しながらやると、成功率が上がります」

教室の中は、まだ緊張感で張り詰めているのを感じます。

誰もが口を閉ざし、真剣な瞳で私を見つめています。

「治療魔法は、元の状態をイメージするのが一番いいと思うので、みなさん全ての臓器など身体の仕組みをしっかり勉強してください。それでは、席に戻って座ってください」

私は、笑顔を浮かべながら話を続けます。

「この教室に魔力ゼロの人は、いなかったみたいですね。今初めて魔力を感じた人もいるでしょうが……大体の人は、今まで使えていなくても魔力を感じた事があると思います」

全員の顔を、ゆっくり見渡します。

その顔は、最初の騒めきの時とは明らかに違っていると思いました。

「不思議だと思った事はないですか？ なぜ、全ての人が魔法契約が結べるのか？ 魔法を使える人が作成したから魔法契約書は有効になると考えられています。魔力を持っていないと認識している人が記入しても効力がある意味……」

誰かが唾を飲み込む音が、静かな教室で響きました。

「それは、ほとんど全ての人が魔力を持っているからです」

先ほどの魔法契約書を、私はマイ靴から取り出します。

みんなに見えるように、なるべく高く掲げます。

「知らないうちに、その人の魔力が名前のサインに宿っているんです」

息を呑む音が、数人から聞こえます。

「今、みなさんは力を手にしました。この力を悪用しようと思うと、誰かを傷つけられます。しかし、私はその悪用の線引きは、とても難しいと思います。自分が殺されそうになった時、相手を傷つけたら悪用でしょうか？ 自分の大切な人が殺されそうになったら？ どうしてもお金が欲しくて、治療をするからお金を要求したら？ 国の為に、誰かの為に使う力は、悪用でしょうか？ それを判断するのは、誰でしょうか？ ここから始まる様々な事をどう広げていくか、どう使っていくかはここにいる一人ひとりにかかっています」

一息置いてから、話を続けます。

「私は責任を取ると先ほど言いました。何か問題が起きたら、自らの手でその方を止める覚悟があります。毒にも薬にもなる。魔法も権力も、そういうものだと思います。ここにいる方は、どちらもお持ちの方々です。その使い方を決めるのは、私ではないです。でも、力を渡した私は見えます」